

核を放棄して侵略された国、侵略されまいと必死に核を持った国、核が無理ならせめて生物化学兵器を！と考える国：共通しているのは、皆必死で、独立自尊、主権を護ろうと血のにじむ努力をしている点だ。

我が国はどうだろう？皆必死に、真剣に考えているだろうか？

メディアは「豊洲」と「五輪」、俗世間は「ゲス不倫」に「ポケモンGO」…

それでも一たび大揺れすると、急に原発が心配になる。

過去の大戦どころか、身近な事件・事故すら検証不十分、いや、検証しても改善に踏み出せない国なのだ。敗戦と占領政策が深刻な病となって、国家国民を思考停止にし、機能不全たらしめている。5年前、原発事故により、国民の8割は「核エネルギー」を畏怖し、放棄する決意を固めたように実感した。

しかし、今や聞こえてくるのは、小泉純一郎氏の切なる声だけだ。

この国は核をなめている。「核兵器」と言う、しかもつ面！をする。「再稼働」と言う、致し方ない！と言う。「核の道」の安全保障を真剣に考えてないからこそ、「平和利用の」発電は致し方ない！と言えるのだ。

核兵器保有のリスクより、原発「核発電」事故のリスクの方が明らかに高い！のに、自らの安全保障より、「今の便利」と「えせ平和主義」を優先してしまう。

私は恥ずかしながら、5年前の原発事故で国土や民族の消失という恐怖を骨の髄ま

『核の道 -この国は核をなめている-』

文 白石茂樹 text by Shigeki Shiraishi

で感じ、恐れおののいた。だからこそ、可能な限りゼロにすることが当然だと思うのだが、愚かにもこんな狭い国土に、致命的な数の原発を設置してしまった。また、消費社会の構造依存という現実も簡単には消せない。

「核の道」は、技術上、全てをゼロに戻すことが不可能だからだ。

運営は民間企業！防衛は警備員！事故は軍隊！指揮監督は、官邸？か原子力規制委？か、あえてブラックボックスのまま…5年前と変わらない現実、そして、廃炉費用は国民！だ。東電は、既に株式会社ではない。

畏怖すべき「核の道」：国家・国民が必死・真剣に考えなければ、日本が亡くなってしまふ。ならば、運営は国家、防衛・事故対処は軍隊、指揮監督は防衛出動と同じ運用にすべきだろう。今すぐに、原発には国家が明確に関与し、民族存続のため、8000万人居住可能な国土保全計画の下、原発を5分の1以下に減らすべきだ。安全な場所、結果論ばかりの学者も追放だ。

技術者教育は、国策として、高専や専科大学校を設立、人手不足に備えつつ、将来的には防衛大学校と一体化する。さらには、50歳を過ぎた健康な男子には、年に10日、原発での単純作業を義務化し、核の道の責任をしっかりと担ってもらおう。未来の日本人のために、為すべき決断がそこにある。



Profile

安全保障・教育評論家／1964年、福岡生まれ。関西学院大学法学部卒業、横浜市役所、議員秘書を経て現職。著書に『概説戦後学校教育』『武徳教育のすすめ』。



美楽での連載を束ねた百念撰集
『雲涯蒼天』
定価700円
Amazonにて販売中